



第20回

春季特別展

「棟方志功 — 『板画』への挑戦」

棟方志功が求めたのは、白と黒の面が織りなす美。

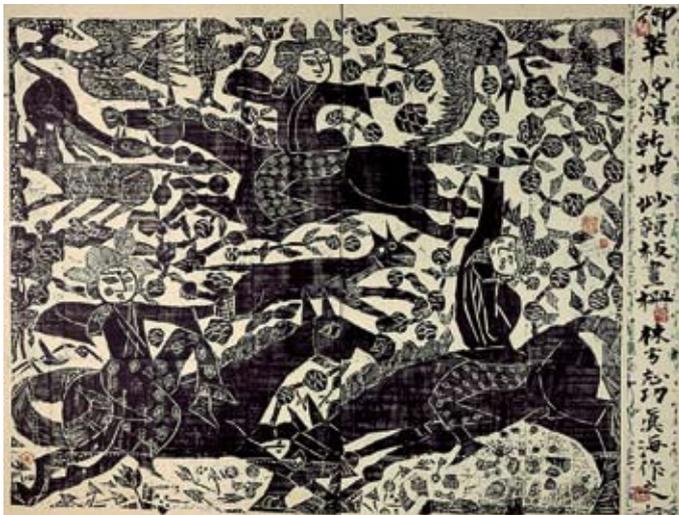
白は黒を活かし、黒は白を活かす。平面性の高い木版画でこそ引き立つ世界。

「華狩頌」という題名で知られる本作は、東西南北の空に矢を放つというアイヌのお祭りと高句麗古墳の壁画からヒントを得て制作されたもの。

一見、狩猟図のように見えますが、よく見ると、馬に乗った3人は武器を持っていません。弓矢を持ってかまえる“ポーズ”をとっているだけです。その周りには犬、花や貝などが散りばめられており、白黒の画面ながら華やかな印象を与える作品です。

この作品について彼は「けものを狩るには、弓とが鉄砲とかを使うけれども、花だと、心で花を狩る。きれいな心の世界で美を射止めること、人間でも何でも同じでしょうが、心を射止める仕事、そういうものをいいなあと、弓を持たせない、鉄砲を持たせない、心で花を狩るという構図で仕事をした」といっています。

美を狩って観る人の心を射止める。これはまさしく、志功の「画家」という仕事に



棟方志功「御華狩頌乾坤妙韻板画柵」栃木県立美術館所蔵
1954（昭和29）年制作 1955（昭和30）年摺

ほかなりません。そしてその仕事は確かに成功を収めているのです。本作は高い評価を受け、海外でも多く収蔵されています。志功の美は世界の心を射止めたといっていでしょう。

ちなみに今回の展示品〔～6月3日（日）まで展示中〕では、緑と紫に彩られた、志功の手になる題箋がつけられています。この題箋も、華やかさを増す要素となっています。志功は表装にもこだわりを持っていたといえますから、おそらく本作の表装も彼の指示によるものだったでしょう。

実は独特な表装も展覧会の隠れた見所のひとつなのです。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 津田卓子

ばとうの観光写真
コンテスト受賞作品

ミニギャラリー
作品募集!

あなたの作品をここに展示してみませんか?

絵画、写真、絵手紙などの作品をお待ちしております。
申し込み・問い合わせ：企画財政課 ☎0287-92-1114

谷川の里は花さかり
菊池幸夫さん（谷川）



ミニ
ギャラリー



風に吹かすのぼり